

第485回 1月27日開催  
出席委員（50音順・敬称略）

荒巻 裕	大村 英昭
倉光 弘己	木下 明美
櫻井 美幸	深井 麗雄
森 輝彦	

テレビの「視聴率問題」について

**\*木下委員**

視聴率は、放送局にとっては営業面で大きな影響があるかもしれないが、視聴者にとってはあまり関係のないことである。その視聴者の一人として言えば、もう一度原点に立ち返って、視聴者の側に立った本当の意味のテレビメディア批評をきっちり確立しないと、お茶の間の側の味方がいなくなってしまうのではないか。

**\*深井委員**

提案だが、この番組審議会とは別の形の番組批評会、批判会といった場を積極的に作って見たらどうか。毎日新聞では、以前から1週間ごとに記事についての内部批判会を開いていて、その内容も紙面で公表している。MBSでも、番組の中味について厳しく吟味、議論する場が番組作りの上で大切だと思う。

**\*櫻井委員**

多チャンネル時代に入り、今まで以上に選択肢が増える中で、視聴率に一喜一憂するというのはほとんど意味がなくなってくると思う。ただ、視聴率を広告の対価として考えざるを得ないのであれば、視聴率に代る何か別の基準を広告主、広告会社、放送局の三者が知恵を出し合って考えないと前には進まないのではないか。

**\*倉光委員**

視聴者というのは、面白いから見るのであって視聴率が高いから見るわけではない。視聴率は本来ひとつの参考数字にしか過ぎないと思う。また視聴質に踏み込んだ調査手法も必要だが、調査というより議論の材料、番組を向上させるための議論にどう使っていくかということが重要ではないか。

**\*荒巻委員**

今の視聴率は、送り手中心に生み出された調査方法なので、受け手に重点を置いたものに代えるべきではないかと思う。

視聴質については、放送局側が主体的にその調査手法を生み出すのだという決意で臨んでほしい。その際、視聴者の立場に十分立った手法を考え出す努力も必要である。

### **\*大村副委員長**

本格的なデジタル時代を迎える中で、今のようなある意味で一方向的な視聴率調査の時代は多分終わって行くだらう。放送局側も番組ごとの平均的な視聴率というものは、ある程度予測できると思うので、極端に高い、低いといった突出したデータが出た場合は、思い切って切り捨てるというぐらいの見識が必要ではないか。

### **\*森委員長**

今回の問題は、倫理や自律といったキーワードを軸にして改善しようとしても現実的には難しいと思う。出来ることと言えば、各局とも、視聴率が大事なら大事で、社としての方針を明確に打ち出すことである。その場合、視聴率はあくまでも目標であって目的ではないということを忘れてはならない。その社の方針に基づいた番組の評価基準を内外にきちっと示すことが重要ではないか。

去年の12月に行なわれたラジオの関西圏冬季聴取率調査の結果についてラジオ局長が報告した。